

笛吹市探訪

故郷に伝わる武者飾り

今回は、端午(たんご)の節句の由来と、武者飾りについて紹介します。

端午の節句は、中国・朝鮮・日本などで5月5日に行われる年中行事です。中国で始められた行事で、5月を牛の月、5日を牛の日と定め、5月5日を「端午の節句」としました。「端午」には月の始めの午の日という意味があります。中国では、その日にもぎで作った人形を門に飾り、菖蒲(しょうぶ)酒を飲んで、毒気を払いました。

日本の端午の節句の行事は、奈良時代に、御所で馬を走らせる行事などをを行ったことに始まります。鎌倉時代には、武士が端午の節句



諏訪法性の兜



金太郎人形

にたこ揚げ・綱引き・競馬などを行うようになりまし。また「菖蒲」を「尚武(しょうぶ)」「武をたつとぶ」とかけて、尚武の節目の行事として、5月5日に盛んに端午の節句を祝うようになりまし。

江戸時代になると、武家で男子が生まれた際、門の前に馬印(うまじるし)やのぼり旗を立てて祝うようになりまし。また、武家以外にもこれらの風習が広がり、端午の節句に鯉のぼりを揚げるようになりまし。やがて、鯉のぼりだけでなく紙の兜(かぶと)や人形を飾るようになり、武者人形へと発展していきまし。

第2次世界大戦後、5月5日は、

子どもの日として国民の祝日となりました。この日には武者飾りなどを飾り、鯉のぼりを立て、男子の健康を願うようになりまし。

武者飾りには色々な種類がありまし、主なものを次に紹介しまし。

「諏訪法性(すわほつしょう)の兜」は、川中島合戦の錦絵などで武田信玄が着用している姿が描かれていま。この「諏訪法性」とは、諏訪明神のことです。ふるさとの英雄「武田信玄」のように力強く育ってほしいという願いを込めて、武田信玄の兜を飾ったのでし。

「金太郎人形」は、強く元気な子どもの代表として、江戸時代から端午の節句に飾られるようになりまし。

「金太郎」は平安時代の武士・坂田金時(さかたのきんとき)の幼名で、昔話・童話に登場しまし。笛吹市で所蔵している金太郎人形には、「熊とうさぎが相

撲を取り、金太郎が行司(ぎょうじ)」、「馬に乗り、マサカリを持つ金太郎」、「鯉を釣り上げている金太郎」などがあります。

「大鎧(おおよろい)段飾り」は、大鎧・太刀(たち)・鯉のぼり・吹き流し・陣太鼓・陣笠(じんがさ)・菖蒲の花などを3段の棚に飾りまし。

大鎧は武器ではなく、子どもを病気等から守る防具として飾られまし。今回紹介した武者飾りは、八田家書院で5月9日(日)まで展示していま。皆さんも八田家書院を訪れ、伝統ある端午の節句を体感してみてはいかげすか。



大鎧段飾り